［特別講演Ⅰ］

外的表象としての史料
――医史学における批判地図学の応用可能性について――

鈴木晃志郎
富山大学人文学部 准教授

Ⅰ．はじめに

この世に生まれ落ちたときは，自分が何ものかすらあやふやな乳児．程なく自分の存在を認識できるようになった彼らが，次にすることは何だろうか．それは自らを取り巻く世界の探検である．こうした人の生涯発達の歩みは，科学の発達史に置き換えても見事に同じ順序を辿る．人類が最初に獲得した科学は哲学であり，これに続くのが身の回りの世界を知る科学，古代ギリシャの賢人たちが地表（ゲー：ラテン語のガイア）を描写（グラフィア）する学問と呼んだ「ジオグラフィ＝地理学」である．

勇気ある探検家たちはかくて，未知の世界を次々と踏破し始めた．しかし，それを何らかの方法で記録に留めて持ち帰らなければ，情報は共有できない．ゆえに，科学としての地理学の発展は，未知なる世界の情報を記録するための媒体である地図を製図する科学すなわち地図学の発展と不可分の関係にある．人類最古の地図とされるカモニカの岩絵地図が彫られたのは紀元前約1500年．先史時代と呼ばれる，文字による記録すらも及ばない大昔のことであった（織田2000）[1]．

それから数千年を経た現代，衛星画像は200km上空から数cmのものを捉えることができ，携帯電話やカーナビに実装されたGPSは，移動中でも地球上の現在位置を捕捉する．高度な専門職にしか許されなかった作図すら，電子地図が可能にしつつある．かつて一部の特権階級や専門職の人たちだけに共有が許された地図は，今や誰もが気軽に，ときに無償で利用できる時代になった．少し難しい表現でこれを「ユビキタス・マッピング」――いつでもどこでも，誰でも地図を利用・共有・作図できる状態――という．

地理情報技術の進展でユビキタス・マッピングが実現したことによって，新たに明らかになってきたことがある．それは，地図の作り手は各々の目的に沿って，形式上の制約にとらわれず地図を描くということであり，地図はそれを作図し，印刷して配布する手間をかけても自身に何らかのメリットがある作り手によって作られるということである．日本で官製地図の作成を担う代表的な機関といえば国土地理院だが，測量法を始め災害対策基本法や武力攻撃事態法などの法令によって，その事業は細かく規定されている．しかし民製地図にこうした縛りはない．ゆえに，私たちが民製地図を手にとって利用する際には，作り手が地図に込めたメッセージや意図，作り手の価値観や描写対象への理解のありようもまた，同時に伝えられることを考慮に入れておく必要がある．皮肉にも，地図が“民主化”されることによって，地図に込められた意味や文脈，作図当時の時代背景などに，研究者のまなざしが向けられるようになったといえる．このように地図を主観やイデオロギーの産物と捉え，図の表現や内容を分析の対象とするアプローチを批判地図学（Critical cartography）と呼ぶ．

Ⅱ．批判地図学とは何か

批判地図学の先駆者は，イギリス出身の地理学者J. B. HarleyとD. Woodwardである．1987年に著した大著『地図学の歴史』において彼らは，地図を「人間世界の事象や概念，状況や過程ないし出来事の空間的な理解をうながす図的表象」（Harley and Woodward 1987, p. xvi）[2]とした．彼らは地図を製図者や

そのパトロンたちによる権力行使のための道具とみなし，地図に象徴された地物や，地図中に含まれる誇張や捨象などの手がかりを通じて，作り手側の意図や時代背景などを読み解こうとしたのである（Crampton and Krygier 2006）[3]．

Harley らは地図史の研究者だったので，当初，批判的に地図学の分析をするにあたって主に材料となったのも古地図であった．このため，特に古地図分析においては，批判地図学的な見地から多くの成果が蓄積された．研究の結果，古地図の多くで，パトロンの宗派の意向を反映し，改訂の際に一部の宗教施設や聖地が誇張されたり，異教徒の宗教施設が抹消されたことが明らかになっている（e.g. Manners 1997[4] , Rubin 2005[5]）．

批判地図学は，古地図のみならず，ある種のイデオロギーや主観性を帯びた地図であれば幅広く対象とする．表装や挿し絵でスラム地区が巧みに隠蔽され，異常に多くの女性の写真が掲載されているナイトライフの案内資料を通じて，タイのセックス・ツーリズムを論じた Del Casino Jr. and Hanna（2002）[6]，戦時下の日本で行われた，石油施設や空港などの機密情報が敵方に漏洩することを怖れた参謀本部陸地測量部による，旧版地形図からの地物の抹消作業（戦時改描）を報告した品田（2010）[7] は，いずれも批判地図学的な地図分析の例である．

上記の多くが注目するのは，地図中の地物の描かれ方である．一方，地図の範域に関して批判地図学的に考察した例としては，地理的身体（GEO-body）の概念を提唱したトンチャイ（2003）[8] の研究成果がある．19 世紀末，英仏との紛争などを通じて，それまで小国家の複合体でしかなかったタイにも，次第に西欧的な国体や国家観が必要になってきた．やがて国土の保全と拡大のため周縁地域の小国家が統合され，それらはシャムとして地図化されていった．トンチャイはタイの古地図を比較分析することにより，この地図化行為を通じて統一的な意識をもったネーションフッド（国民意識）や地理的身体が概念化され，獲得されていったことを示してみせた．

この地理的身体を概念装置に用い，長年にわたるパレスチナとイスラエルの紛争が双方の作る地図にもたらす影響を論じたのは Wallach（2011）[9] である．イスラエルはかつて，公教育の場で領土拡張のために児童のなけなしの小遣いを拠出させる『青い箱』運動を行っていた．青い箱にはイスラエルの国土が描かれているが，その国境は明瞭でない．なぜならそれは，児童の寄付（＝国に捧げられる犠牲）を通じて，初めて形をなす未完の事業だからである．彼らによって国土を寸断されたパレスチナの人々の描く領土が，いずれもくっきりと匕首の形をなすのとは対照的である．重なり合う国土をめぐる 2 つの地理的身体の軋轢．Wallach は批判地図学のアプローチを駆使して，それを鮮明に描き出している．

Ⅲ．地図が可視化する見えない世界

批判地図学の狙いは，時に作り手にすら意識されていない偏見や先入観などを，地図から読み解くことである．いきおい，批判地図学の分析は，定量的な手法よりも定性的な手法に多くを負うことになる．「ほら，この古地図の隅に妖怪がいるでしょう．この地図の中心は聖地エルサレムですから，隅っこは異教徒の世界．キリスト教にとっての異教徒を，異形の者に象徴させてるんですよ」といった説明のやり方である．しかし，学問としての可能性を広げるためには，批判地図学は定量的な分析にも堪えるものでなければならない．そこで筆者は，民製地図をコンピュータに取り込んで解析できる地理情報システム（GIS）を用いて，批判地図学を定量的に実践する試みを進めている．

3-1. 対象地と作業仮説

筆者がこの批判地図学的な分析を適用しようと考えた場所は，鞆の浦（とものうら：広島県福山市鞆町）という，沼隈半島の東南端に位置する小さな港町である．鞆の浦では，自治体が強行しようとした

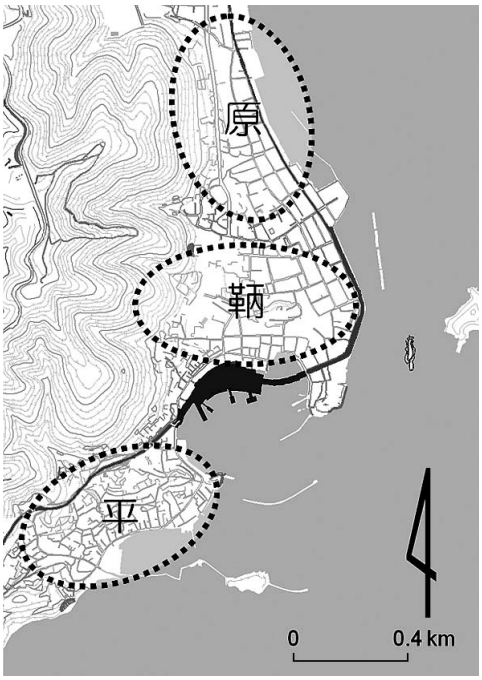

図1　鞆の浦の各地区の位置関係図
両側から延びる黒線部が県道．図中央でそれを結ぶのが架橋計画部分（筆者作図）

架橋道路の建設をめぐり，住民や文化人，有識者たちから全国規模の反対の声が挙がった．彼らの起こした景観訴訟の結果，歴史的景観権という新たな概念が初めて裁判で認められたことにより，鞆の浦は一躍全国区の知名度を獲得した（鈴木ほか2008[10]，Suzuki 2011[11]）．近年はNHKの大河ドラマ『龍馬伝』やジブリの映画『崖の上のポニョ』構想の地としても話題を呼んでいる．

急峻な山々が背後に迫り，前には瀬戸内の海．二者に挟まれた僅かな平地に人口4,000人ほどが暮らす．決して恵まれているとはいえない土地条件ながら，江戸時代には福山藩の藩港となり，朝鮮通信使や北前船などの寄港地として繁栄を謳歌してきた．しかし明治維新後は藩港の地位も失われ，動力船の出現やモータリゼーションの影響で，町は急速な人口減少と高齢化の中にある．こうした若年層の「鞆離れ」の主な原因とされたのが，歴史ある街ゆえの慢性的な生活環境の悪さだった．クランクを多用した城下町特有の街割や，古い街ゆえの狭小な道路幅員のため，通過車両による渋滞や救急・消防サービスの遅延などが日常化していた．

そこで1983年，港を横切る架橋道路の建設計画が地元自治体により示された．鞆町港湾部を挟んだ両岸までで寸断された2つの幹線道路を，港を横断する680 mの道路橋で結ぶ計画である（図1）．これにより，渋滞の解消のみならず，フェリー乗り場や小型船用の係留設備，港湾管理施設のほか，観光客向けの駐車スペースを創出する狙いがあった．

しかし一方，歴史ある街ゆえに，鞆には江戸期の古い建築物が多数残り，その歴史的景観は観光資源になっていた．港湾部に出現する異物は景観の死を招きかねない．かくて架橋事業を契機に，街並みの歴史的価値を最大限尊重し，不自由を承知で景観を現状のまま保全するか，それとも住民の生活の利便性を確保すべく海上に架橋し町を改変するかの相容れない選択肢の間で，鞆の浦は大きく揺れ動きながら今日に至っている．

鞆町は，問題の渦中にある港湾部を有した「鞆」を挟んで，南側に「平（ひら）」，北側に「原」のおおまかに 3 つの地区からなる（図 1）．港湾架橋事業の予定地はちょうど鞆地区の港湾部にあり，架橋予定地の周辺は，重要文化財の太田家住宅や常夜灯など，代表的な観光資源を有する鞆町屈指の町並み保全地区である．

平地区の住民は，狭隘な鞆町中心部の道路を抜けずには福山市へ出られない．このため道路狭隘の影響を最も受ける受苦者であり，反対運動を率いる松居氏も指摘するとおり，架橋事業への期待もとりわけ大きい（松居 2008）[12]．しかし，それまで進めてきた実態調査の結果，筆者はむしろ外部者に対する態度や価値観の違いに，架橋推進派と架橋反対派を隔てる大きな要因があることに気がついた．反対派がこれまで掲げてきたスローガンをみていくと，「世界遺産」，「5 点セット」，「ポニョ」，「景観」など，観光客や学識経験者を含む外部者のまなざしを通じて，鞆の景観価値を規定するスローガンが並んでいる．これに対し，架橋推進派を代表する地域組織の「明日の鞆を考える会」が掲げるスローガンは「生活権優先」であった（鈴木 2010）[13]．つまり，架橋推進派は生活環境改善から鞆の明るい未来を描くのに対し，架橋反対派は観光地としての鞆に未来のビジョンを託す構図である．同じ鞆の浦という場所に対して異なる価値づけをし，それゆえに対立を深める 2 つのグループ．批判地図学はここに，どのような貢献の可能性を見いだせるだろうか．

3-2. 民製地図分析ツールとしての GIS

ここで今一度，鞆の浦にとって観光案内図とは何かについて考えてみる．観光客向けに作成され，町内で設置・配布される鞆の浦の案内図は，町の人は既に知っている観光名所が載せられている．逆に町の人にとっては重要な日用品の特売日は観光案内図に載せても仕方ない．つまり生活環境としての鞆の浦を図中から捨象した，外部者向けの「観光圏」のあらわれが，鞆の浦の観光案内図である．従って，多様な作り手が思い思いに図化した鞆の浦の案内図を重ね合わせ，その範域の一致度を検討すれば，鞆の浦の観光圏の範域に一定の合意が成り立っているのか，それとも全くアットランダムに画定されるものに過ぎないのかを可視化することができるばかりでなく，その空間的分布特性までも解明できる．

そこでまず，鞆の浦で入手可能な観光案内図をできるだけ数多く収集し，これをスキャナーで電子ファイル化した．同時に，鞆町町内に設置されている複数の案内板についても，これをデジタルカメラで撮影し，画像データを取得した．その結果，11 種類の案内図と 4 種類の案内板が分析対象となった．

次に，ゼンリン社から提供されている経緯度座標付きの電子住宅地図を位置参照用のベースマップとし，GIS に実装されているジオリファレンス機能を用いて，各々の画像データとベースマップとのマッチングを行った．マッチングとは，原図と歪んだ地図に共通して記載されている地物などの手がかり（コントロールポイント）を使って，複数の地図の縮尺や方位を揃え，重ね合わせることである．古地図とは違い，観光案内図の多くはベースマップを下敷きにして作成されていたため，地図の歪みは少なく，厳密な幾何補正をせずにベースマップ上にマッチングできた．

3-3. 見出された観光圏

図 2 は，各案内図の範域を GIS 上で重ね合わせ，各々の描写範域の重複度を濃淡で表示させたものである．従って色の濃いところほど，より多くの地図で描写対象に含まれている．一見して明らかなように，作図者はさまざまであるにもかかわらず，描写密度が圧倒的に高いのは，ほぼ鞆地区を中心とする港湾部の美観地区およびその周辺であった．対照的に，ほぼ全ての地図が平地区や原地区を対象範域から外している．

続いて，GIS が実装している「標準距離の算出」機能により各図の重心を算出し，その分布傾向から

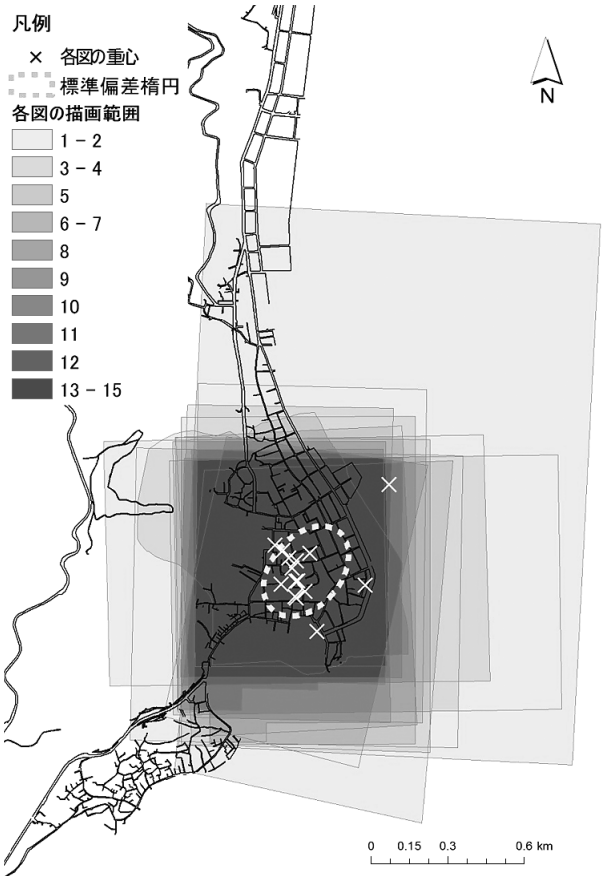

図2　観光案内図の描画密度と各図の重心，標準偏差楕円（筆者作図）

1標準偏差で標準偏差楕円を描かせた（図2）．するとここでも，各図の重心は鞆地区の中心にある鞆城趾（現・歴史民俗資料館）周辺の僅か300mほどの範囲に集中しており，それによって描かれる標準偏差楕円も同様の傾向を示すことが分かった．つまり，鞆の浦の観光圏は，鞆地区を中心とする僅か800m四方の範囲内にほぼ限定されている．原地区と平地区は，行政区上は間違いなく鞆町でありながら，外部からの来訪者に向けて鞆の浦をアピールする際には黙殺され，捨象されていたのである．

2010年，前年に当選した湯崎知事の提唱により，広島県は架橋を巡って対立する住民間の対話を促す住民協議会を設けた．2年に渡る議論を受け，2012年に県は事業撤回の方針を打ち出した[14]．今秋の知事改選の結果は予断を許さないが，今後鞆の浦では大なり小なり観光を軸にまちづくりが進むことが予想される．この場合，本稿で示された地理的条件の格差や住民間の意識差を丁寧に検討し，観光業には無縁の住民にも支持される，きめ細やかな観光まちづくりの指針を立てていくことが必要不可欠であろう．

Ⅳ．おわりに　――医史学と批判地図学の架橋――

今般，医史学という学問分野の存在を初めて知った筆者の見解には，誤解も多いことを予めお詫びした上で，最後に批判地図学からみた医史学との連携可能性について言及してみたい．

酒井[15]（1972, p.252）の言葉を借りるなら，「医療，医学の歴史は日本の文化史を明確にする上でも欠

くべからざるもの」であるから，「文献の探索や故事来歴の詮索」をもとに「文化史上での位置，役割」を問い直したり，「医学，医療の歴史を将来のものに結びつけて考え，歴史を学んでそれらの将来の綜合的指針になるものを把みとろうとする」試みが必要であり，これが医史学の使命といえる．

ここで重要なのは，文献や故事来歴のほとんどは，われわれが直に追体験できない事実を，記述者の手を借りて間接的に経験するための情報源だという点である．われわれは直接経験できない限り，何らかの間接情報源（外的表象）に依拠するしかない．外的表象は（1）地図，絵画，写真，模型などの「静的な絵画的表象」，（2）動画，ビデオ，映画，VRなどの「動的な絵画的表象」，（3）道案内文に代表される言語，の形を取りうるが，これらは情報を伝達する媒体という点においては同じ機能をもつ（Montello and Freundschuh 1995）[16]．つまり，情報伝達を機能性で評価すると，史料の形質的な差異（地図の形を取るか，文字の形を取るか）は二次的な問題である．批判地図学者が手がかりとする地図は，医史学でいう文献や故事来歴にあたる．それらはいずれも，外的表象であると同時にひとつの史料であるから，この点で批判地図学と医史学は，批判的史料分析の関心や可能性を共有する研究領域といえよう．

前述の論考で酒井は「史実集積とその価値がつけられ，医史の大よその流れをつかむまで体系化されたが，それを更に深めるにはまだ医史学を専門に学ぶものの数はわずかであって，その弱体がなげかれている現状」としていた．それから40年の時を経た今，医史学の現状はいかがであろうか．生憎，筆者はそれを云々できるだけの定見は持ち合わせていない．それでも2013年の今，関連誌を紐解くと，西洋医学に傾斜していく明治期日本にあって西洋医学と漢方の融合を模索した和田啓十郎『医界之鉄椎』の史的意義を再評価しようとする寺澤（2012）[17]や，明朝期以降の中国で訳出された西洋医学書において「筋」から「脳筋」，「神経」へと至るnerveの訳語の変遷を辿り，その概念の受容過程を検討する松本（2008）[18]など，筆者の目にも批判的史料分析に含めうる研究を容易に見つけ出すことができる．酒井のいう「歴史を学んでそれらの将来の綜合的指針になるものを把みとろうとする」医史学と批判地図学との対話が，本稿をひとつの契機として進むなら，望外の喜びである．

文　献

1）織田武雄．地図の歴史―世界篇．東京：講談社；2000
2）Harley, J. B. and Woodward, D. eds. The History of Cartography. Chicago: University of Chicago Press; 1987
3）Crampton, J. W. and Krygier, J. An introduction to critical cartography. An International E-Journal for Critical Geographies. 2006; 4（1）: 11–33
4）Manners, I. R. Constructing the image of a city: the representation of Constantinople in Christopher Buondelmonti's Liber Insularum Archipelagi. Annals of the Association of American Geographers. 1997; 87（1）: 72–102
5）Rubin, R. One city, different views: a comparative study of three pilgrimage maps of Jerusalem. Journal of Historical Geography. 2005; 32: 267–290
6）Del Casino Jr., V. J. and Hanna, S. P. Mapping identities, reading maps. In Hanna, S. P. and Del Casino Jr., V. J. eds. Mapping tourism. University of Minnesota Press; 2002: 161–185
7）品田光春．地図から消された油田．地理誌叢 2010；51（2）: 19–29
8）トンチャイ・ウィニッチャクン著・石井米雄訳．地図がつくったタイ　国民国家誕生の歴史．東京：明石書店；2003
9）Wallach, Y. Trapped in mirror-images: The rhetoric of maps in Israel/Palestine. Political Geography. 2011; 30（7）: 358–369
10）鈴木晃志郎・鈴木玉緒・鈴木　広．景観保全か地域開発か：鞆の浦港湾架橋問題をめぐる住民運動．観光科学研究 2010；1: 50–68
11）Suzuki, K. Some overlooked drawbacks of Japanese media-induced tourism: A critical reinvestigation. The Journal of Ritsumeikan Geographical Society. 2011; 23: 1–15
12）松居秀子．鞆の浦・架橋埋立てによる景観問題をめぐる課題および世界遺産訴訟から．2008年度第5回都市環境デザインセミナー．「福山・鞆の浦」から景観を考える；2008．http://judi2. sub.jp/judi/s0805/to1.pdf（accessed: 2010.8.6）

13）鈴木晃志郎．世界遺産登録と観光．深見　聡・井出　明編．観光とまちづくり．東京：古今書院；2010．73–96
14）大澤恒夫．鞆の浦ミディエイション．法政研究 2012；79（3）: 611–640
15）酒井シヅ．日本医史学会の沿革．医学図書館 1972；19（3）: 249–252
16）Montello, D. R. and Freundschuh, S. M. Sources of spatial knowledge and their implications for GIS: An introduction. Geographical Systems. 1995; 2: 169–176
17）寺澤捷年．『医界之鉄椎』から一世紀たって．日東医誌 2012；63（2）: 89–97
18）松本秀士．中国における西洋解剖学の受容について――解剖学用語の変遷から．或問 2008；29（15）: 29–44